

チャレンジ講座の報告

1. 小論文を書いてみよう！！

2年生26名、3年生56名の希望者が小論文模試にチャレンジしました。初めての挑戦で、ペンが止まる生徒も見られましたが、それぞれの興味関心に応じたテーマを選択し、要約の作成、意見・主張をまとめました。



2. 看護の出前講座

岐阜県看護協会の服部京子様、岐阜県厚生農業協同組合連合会 中濃厚生病院 看護部長（認定看護管理者）大野貴子様、看護副部長 後藤麻衣子様、看護師長（救急看護認定看護師、災害支援ナース、DMAT）川上雅代様を講師にお招きし、4名それぞれの方の具体的で、かつ看護師としての使命感や情熱を感じさせる話に生徒たちは真剣に聞き入っていました。認定看護師や専門看護師といった看護師としてのステップアップの話は現実的で、看護師になった後の人生に関わる重要な話題もありました。

災害ナースの活動の紹介では、能登半島地震の災害支援をされた方の実体験を聞くことができ、また「加茂高校の体育館を避難所にしたら？」というグループ演習を行いました。加茂高校は、ペットと避難ができる避難所に指定されていますが、避難所のレイアウトや、何が必要かなどを4人1組で検討し、全体での振り返りを行いました。グループ演習では講師の先生方が各グループを回り、ご助言をいただき、生徒にとって学びの多い時間となりました。



3. データ活用講座

岐阜県統計課より4名の講師をお招きし、統計データの見方、岐阜県・美濃加茂市の概要紹介、統計データの探し方、データ分析演習入門を行いました。参加者の多くはデータの分析方法に関心が高く、まずは地元である美濃加茂市の概要をデータから分析した紹介を聞き、何のためにデータを使い、どう伝えるのかを明確にすることの重要性を感じました。その後、【あなたは、加茂地域8市町村の特徴をプレゼンすることになりました。まずは、面積について、岐阜県内の市町村との比較について考えました。「市町村別の面積一覧（岐阜県）」をグラフ化し、特徴があるか、探ってみましょう。】という課題に対し、実際に統計データのダウンロード、分析のためにグラフ作成を行いました。データをしっかりと見ることで外れ値があると平均をあげる(下げる)ので中央値をとったほうが良いといった見方や、ただグラフ化するだけでなく、何をどう伝えるかを考えて作成することを教えていただき、個々に伝えやすい工夫をしていました。



感想

・講座を聞いて、ただデータをまとめるのではなく、そこから、何を伝えたいのか、特にデータであらわした対象の先がどうなっていくのが重要であるとわかった。グラフをつくることには謎の自信があったが、今回かなり苦戦した。やはり、伝えるべき情報を正確に伝えていくために、グラフにも一手間かかっているものだと感じた。この先、様々な場面で多くのデータをまとめる際には、常に対象を自分ではなく大衆に向け、見やすいデータ処理を心がけていきたい。

・知ってそうで知らなかった、岐阜県内の美濃加茂市の位置や、全国で見た岐阜県の位置をデータから見る事ができた。情報の授業で学んだ内容に加え、データの見方、見やすいデータの作り方を知ることができ、実際に Excel の演習で、グラフを作って楽しかった。

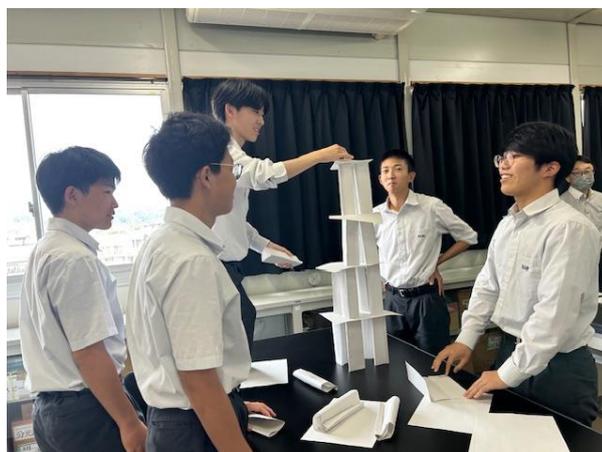
・今回の講座で統計データの注意点について、データの背景と変化の要因を探る時、わずかな差を強調しすぎないことや外れ値が出る特殊要因について考えることの重要性を再確認しました。割合率だけを見ず、実数を見ることの重要性も知りました。

4. 『建築産業の仕事・ペーパータワーゲーム』

前半は建築産業、土木産業それぞれの概要とその魅力についての話を聞き、建築産業には、建築だけでなく、建設コンサルタント、建設会社など多くの職種があること、また、建てたら終わりではなく、維持のための活動があることを学びました。そして、生命・健康・財産の保護、経済活動や社会活動の拠点のため、なくてはならない産業であることも再確認できました。

後半は5～6人のチームになってペーパータワーゲームを行いました。A4用紙30枚でいかに高いタワーを作るか、どのチームも限られた時間内で話し合い試行錯誤しながら取り組み、PDCAサイクルの重要性を体験することができました。

「土地の調査から立てた後の維持活動までが建築土木の仕事で、私たちの生活に関わる大切な役割だと知れた。」「様々な人が関わって建築物ができていくと考えると、1つの建築物ができるまでの苦労などが想像できて感動した。」「ペーパータワーゲームを通して、現場監督になったつもりで考え、PDCAサイクルを実践的に知ることができた。」などの感想がみられ、学びの多い時間になりました。



5. 懇話会「理学部進学を考えている人へ」

講師： 丹羽公雄 名古屋大学理学部名誉教授



丹羽先生は御嵩町在住で、名古屋大学理学部物理学科で素粒子研究に携わりました。素粒子ニュートリノのうち検出が難しかったタウニュートリノを、原子核乾板（写真フィルム）を用いて1998年に世界で初めて検出しました。2015年ヨーロッパとの共同実験でミューニュートリノがタウニュートリノに変化するニュートリノ振動を初めて確認し、ニュートリノに質量があることを裏付ける決定的な証拠となりました。

講座では、日本では研究職を志す若者が減ってきている一方、中国や韓国などに論文の数や大学生の熱意で劣っていることに危機感を抱いていて、生徒には研究職を目指して欲しいことを熱く語っていただきました。また、日本人のノーベル賞を受賞した研究者でも英語ができない人がいることを紹介され、苦手なことがあっても熱意をもって研究に取り組むことで成果が挙げられること、やりたいことがあるのならば自分から関係する大学の研究室に出入りすればよいこと、優れた研究にはその研究を支える技術者がいることなど語っていただきました。ヨーロッパの研究者は、文化を大切にしている、研究だけでなく音楽の素養があったり、来日した際には日本の文化を楽しんだりなどのエピソードも紹介されました。

生徒の感想から

- ・今回の講座に参加し、まだ若いうちにいろいろなことを体験してみようと思いました。職業に関わらず、好きなことにのめり込み挑戦し続ける人は、とても強く偉大なことをし遂げていることを知り、そのようなのめり込めるほどに好きなことを見つけたいと思っています。
- ・初めから名古屋大学に行かなくても、どこか別の大学から研究したいという気持ちをもって研究室へいくという手があるということが知れたためになった。好きなことにのめり込んでしっかり探究したい。「偏差値なんて関係がない」という言葉が印象に残った。